

# 十一月作品

## 月集スバル



☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

哀しいな

古屋 祥子 群馬 馬

恥<sup>やま</sup>しみて身を縮めるに介護者は「ええい」とばかり胸押し開く  
「ごめんね」や「済まないねえ」と言ふ聞けば引き剥がされる裸身<sup>やほら</sup>和<sup>やほら</sup>く  
〈哀しいな〉眩<sup>くら</sup>きは一笑された後〈今さら何を〉と返されて来ぬ  
「惚<sup>ぼ</sup>け者<sup>もん</sup>」はまともな人間とは言はぬ しかし時には真面<sup>まとも</sup>であます  
一字見てまた視てまなこを瞑るなり視力のあらぬ目を守らんと

あつぺとつぺ

狩野 一男 東京

寡黙なる「おかえりモネ」はをはりたりそろそろ出掛けようぜ暑い  
アツいまたあづっ！と騒<sup>やっがれ</sup>ぐ僕をワイフ・アカサキどう思ふらむ

われはもよ汗かき亭主あさにけに我が背浄むる汗拭き女房  
絶好のプール日和となりけり「かもめの水兵さん」うたひたし  
オリンピック・パラリンピアンにこの夏の東京大会、あつぺとつぺか

北の窓

宮里 信輝 神奈川

「緊急事態宣言」の夏元氣もらふ蟬の渾然求愛のこゑに  
裏山の木々巨樹となり北の窓占めあるふかきみどりおそろし  
北の窓占めある木々は巨樹となり狂へるみどり台風の今日  
前世は何だつたかな人体はそろそろ捨てて次は鯨に  
靴下の親指さきにあける穴われのこの世の出口のやうな

出土品めく

水上 比呂美 東京

大玉の岩手育ちのラ・フランスみどりの皮に金箔のさび  
夜の卓に向き向きにならぶラ・フランス出土品めく湿度のあり  
アルチンボルドの「夏」の農婦の横顔に黄の洋梨が潜みてをりぬ  
おそ夏の雲に洋梨載せてみむテブルクロスの白さの雲に  
洋梨は香水のやうな名まへ持ちかをりの高く果肉の甘し

☆

☆



水島 晴子 兵庫

汗の背に熱きシャワーがかかるととき介護士Iさんわたしの神さま  
おとがひにそつと手を遣りうつつなき妻の口へと箸はこぶ人  
「ありがとう」「すみません」のみ練り返し語彙ゆるびゆく雨の滴に  
げん 険難ないろの雲なり花ひくきパティオのそらをひたと閉ざせり  
わが裡の否否いやいやつ児こがかぶり振るままに過ぎ来て道を知らずも

杜 沢 光一郎 埼玉

寺庭の枝垂れ桜もほころびておばあちゃんの祥月命日近し  
桜咲く四月の二十七日、眠さうにおばあちゃんはまぶた閉ざしぬ  
眠さうにまなぶたおろしそれつきり 眠りにつきぬ七十七歳  
おばあちゃんがなくなられたのは平成の四月の二十七日覚えておかう  
令和三年の今日は四月の祥月命日 指折り数へて三回忌なる

武 田 弘 之 神奈川

庭内に花を咲かせてムクゲの木カブトムシらをあまた遊ばす  
くろがねの翅をかすかにふるはせて雄のカブトムシ雌メに近づくと  
地中より出でて百日ももかをカブトムシ遊ぶ日本はコロナ禍やの夏  
交接を厭ふや或いは楽しむや雌メのカブトムシ雄オを焦あせらして  
カブトムシ見えなくなりたる庭内にムクゲは赤き花咲かせ立つ

高野 公彦 千葉

歩みくるスマホ男を蹴飛ばせり年寄われの意馬心猿は  
しづかなる生命いのちの城の芯部より想念おもひは秩序なく湧き出づる  
ふる雨の先端さきを迎へて真静かに夜をきらめく水たまりあり  
柱、腕、ポケット、そして机上よりこの世をじつと見守るげんし 天使  
野を走るたつた一輛の車輛のあと陽炎ゆけり幻肢のやうに

仲 宗角 三重

大内山の村人減りて牛乳が売れなくなつたとたすけもとめく  
その昔かはらぬ願ひで来たるなりなきつきて来てたすけもとめく  
その人とどこで会ひても頭さげ山の奥へとかくれて行きし  
退走兵のうはさながれて村人がなま身ではしりき終戦の頃  
のこしゆきし娘が刑にて死にしあと孫の世話しに姿を見せぬ

奥 村 晃 作 \* 東京

印刷はコンビニへ行くHP 63のクロ無きゆえに  
プリンターあれど使えずHP 63のクロ無きゆえに  
二カ月間手に入らざりしHP 63のクロどつと出回る  
いかほどの供給不足であったのか知りたいHP 63のクロ  
HPのインク無くなりもう一台プリンター買わなくて良かった

森 重 香代子 山口

夕ぐれにほろると掛かりくる電話待ちまちて聴く生きものの声  
通り径ふさぎし庭の徒長枝を娘はちさちきと摘みすすみを取り  
娘が行かなといふからに蟬声の杜通り抜けつつ切り絵観にゆく  
ボクサーの弾める脚のころやかさ赤き短パンの裾揺れやまず  
紫陽花は草のいろしてただ閑か梅雨の明けたる庭の片隅



日影 康子 富山

抱卵し越中富山に初めてを孵化せりライチョウの雛鳥六羽  
猛暑の日も夫に欠かさず炊く粥に手づくり梅干ひと粒をのす  
巢立ちして飛び交ふ子燕目守るがに親燕も舞ふ入り乱れつつ  
五輪史上に初めてなりし無観客の会場照らしし聖火は消えぬ  
けふもまた猛暑とならむ朝草に止まる小粒のみどりの飛蝗ばった

影山 一男 千葉

夢といへ友死なしめてわが虚し八月の夜の闇に眼を開く  
もの言へば娘に叱らるる老人になつてしまつた証の一つ  
「ぐりとぐら」読みぬし夏よ息子はや四十を過ぎて子を一人持つ  
コスモスに歌を学びて五十年 雨の八月二十三日  
少しばかり歌がうまいと自負せしを小高賢さん笑ひてくれよ

桑原 正紀 東京

「役場」といふ名が東京に生きてゐることの嬉しもふるさと恋し  
高速度の濃き影に沿ふ道に来て「板橋公証役場」に入れり  
立会人二名のもとに厳めしくわが遺言書ひごんは受理されにけり  
〈不可能を可能に〉などと言ふけれどパラアスリートは神域に入る  
競ふのは「己れ」としてねらふのは自己ベスト あな美はし言葉よ

岡崎 康行 新潟

清流と言はれてきたるふるさとの河岸段丘を掘りすすむ川  
アキタフキをややに小さくしたるもの手ごろなりにき父が植ゑしもの  
信濃川遠く離れて学校のプールの水としてあそびをり  
いくつかの記録とどめし選手らの去りてプールは闇につつまる  
「ゆくりなくひと日ひと日を送りつ」と良寛の晩年もかくありしらし

小島 ゆかり 東京

遠目して遠耳をして木は立てり不可解な象の移動つづける  
北へ北へ大移動する象たちを照らす雲南省のつきかげ  
先頭の象の孤独は眉間もて風を聴くなり大陸の風を  
三叉路に立ち止まるとき吹き過ぐる時間のうしろすがたを見たり  
いつかここで途方にくれることあるか今朝はもうあきかせの三叉路

木畑 紀子 京都

露のせてけさ咲きそむるはまゆふの花のそこひに蟻がきてをり  
たくひれの白きはなびら六まいを反らせ舞ふかな浜木綿姫は  
ふるへ啼く蟬の体より蒼穹に散りてやまざるいのちの火花  
啼きつかれ一瞬だまる街中の蟬まちぢゅうに即死の蟬もまじるや  
好きな木のしまとねりこの幹で啼き根方で果てし蟬のさきはひ

島田 暉 神奈川

晴れし朝起きよ起きよとうながして小鳥らの声障子に踊る  
大ねぐら出でては入るけだものと吾を見てゐむ庭の小鳥ら  
夕闇を引き寄せながら蝸ひぐらしのコーラス続く声しんみりと  
群れをなす蟻より逃れ群れなさず舞ひ去る蝶は孤独の花か  
教会の屋根の十字が突き刺せり悩める吾の暗き心を





福士りか 青森

甲子園球場に雨降りやまずマスク姿の選手待機す

順延につぐ順延の甲子園八年ぶりの出場なるに

一週間延びてやうやく初戦なり聖愛ナインのおもて明るし

とつぷりと肩を凝らせて応援す甲子園での一勝とほし

ピンチには笑顔で向かふ八回裏選手の笑顔がすこし苦しい

藤野早苗 福岡

わが内の水飽和して湿度計70を指す部屋にあぎとふ

長雨に背うそ寒し列島に感染爆発つづくこの夏

百年に一度が毎年やつて来て為政者たちの無明を照らす

中等症患者は自宅療養つて 医療崩壊認めませうよ

スタージョンムーン南へ移りゆく雲はさざれの行き合ひの空

風間博夫 千葉

物差しの目盛りの線に太さあり目盛りの線の右端あてる

「タバコ」から「たまご」に変はるいつのまに「バ」が「ま」に変はる伝言ゲーム

風が引く力はわれが引く力、空に力の糸湾曲す

喫煙者寿命みじかい煙草税払つてゐるのに四年みじかい

ファミレスの席に煙草の煙流れ席を変へると子が言ひ出しぬ

田中愛子 埼玉

ワクチンの副反応とギククリ腰いちどきに起き身は山火事

腰痛がしんけいつう呼びときをりからだに夏のいなづま走る

うとうととしつついつしかユトリロのましろき街に消えゆくわたし

われが消えわが影が消えまひるまの坂にふたたびしづけさは来つ

寝返りのたびに目覚めておそなつのすずしき虫のこゑを聞くなり

橘芳園 新潟

面相に海舟の如き品を欠く継之助は談判決裂させぬ

年下に面罵されたる闇深し光秀も継之助も戦端開きぬ

思慮浅きものの氣負ひが智をおさへ維新の長岡道あやまてり

維新にて戦はざりし金沢は西田幾多郎鈴木大拙生みき

足軽が足軽長屋から出てくれば足軽にしか見えぬ世なりき

鈴木竹志 愛知

大雨に遅延の列車を待つ昼のホームに開く「週刊文春」

「文春」の記事に惹かれて読み耽る菅政権の体たらくなど

ゴシップは大方人の不幸なり不幸の好きなわれは不幸か

いくつもの正義があるを確認し「週刊文春」燃えるゴミへと

車内での無聊を満たすわが道具スマホでなくて電子辞書なり

原賀環子 東京

壁にシミ、手にシミ、壁と四十年、手と七十年ともに過(こ)せば

しみの手で菜(さい)ぎざみつつ気掛りはとにかく遠い病室の姉

蓑虫の姫とし生きて入院のベッドに眠るひとの孤独よ

わが姉はわたしと双子かもしれずあるいは三つ違ひのいもうと

夏中を着たワンピース干してなほ二十年目の着しわがのこる

水上 芙季 東京

パソコンの熱、人の熱充滿し密林の汗かく執務室

十本の指で何かを押しへこむやうに数字文字記号打つ夏

検温し自動扉が開くときコロナに勝つた日本、は見えない

アマリスサルビアカンナゼラニウム赤い花こはいあつい夏だよ

ワクチン接種会場から来る傘はほぼ右手で持たれ雨を受けをり

大野 英子 福岡

けふもまた一時間待ちハローワークの天井の羽根ゆるりとまはる

菅総理がパペット人形に見えてくる眼のうごき、こもる繰り言

デジャビユではない現実の八月の豪雨、首相の同じ発言

売場より小松菜消えた収穫前の小松菜豪雨で全滅をして

健康であたいけれども長生きはしたくなる世の中となる

水明かり市川に住む歌人の好む鰯うたひとのなめろう旨し

なめろうを当てに七賢しちけん飲むゆふべ秀歌生まるる心地に酔ひて

ウイルスの変異、無策なる政府、地震、水害、五輪始まる

一度目は記憶になくてこの度は下心丸見えの東京五輪

柔道の「時間無制限」はるかなるコロッセウムの死闘思はず



島田 暉歌集 令和3年6月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

戦あらずな コスモス叢書第1197篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-14-16

高野公彦歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

水の自画像 コスモス叢書第1199篇 短歌研究社

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼二-1-21-506

小島ゆかり歌集 令和3年7月刊 三〇〇〇円(税別) 送料三〇〇円

雪 麻 呂 コスモス叢書第1198篇 短歌研究社

著者住所 〒184-0004 東京都小金井市本町六-1-101-W302

松尾祥子歌集 令和3年7月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

楯円軌道 コスモス叢書第1196篇 角川書店

著者住所 〒168-0065 東京都杉並区浜田山一-121-14